

いと同じ)「ちゃんと明示したほうが(飲料を持参した人とそうでない人の)『扱いが平等になる』『黙認と『明示すること』では、決定的に違う』と発言している<sup>33)</sup>。

なかなかそう簡単にできない事情もあるかもしれないが、できるだけ利用者として職員側の双方が納得し、より快適に過ごせる環境作りを目指すことが必要ではないだろうか。その際、海外の図書館ではよくみられる「フードポリシー」<sup>34)</sup>のようなものが、ひとつの参考になるかもしれない。

いずれにせよ、図書館と「飲食」に関する議論は、利用者のニーズの高まりとともに、今後ますます活発化するであろう。そして、それに伴い、図書館職員の悩ましきは、一層深くなるのである。

(関西館文献提供課: 島村聡明)

- しまむらとしあき
- (1) 太田聡. 図書館でホットチョコレートを! 山口大学図書館報. HTML版, 2005, (7).  
http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/lib-ews/ln01/ln01-3.html, (参照 2008-11-21).
  - (2) 黛崇仁. 特集, 図書館における飲食マナー: 図書館内での水分の補給: 利用者のマナー. 薬学図書館. 2008, 53(2), p. 144-147.
  - (3) 通常, ポリエチレンテレフタレート (PET) を材料とした容器のことを指すが, アルミ製のいわゆる「ボトル缶」も, リシール可能なことから同様に考える。
  - (4) Gerding, Stephanie. Fund-raising Perks of Library Cafes. Public Libraries. 2006, 45(6), p. 40-45.  
http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/pla/plapublications/publiclibraries/novdec2006pl.pdf, (accessed 2008-11-21).
  - (5) 内閣府大臣官房政府広報室. 水に関する世論調査.  
http://www8.cao.go.jp/survey/h20/h20-mizu/index.html, (参照 2008-11-21).
  - (6) 小野日奈子. “ミネラルウォーター類の水質分析と飲用水に対する意識調査”. 陸水物理研究会 2007 年度滋賀大会. 彦根, 2007-11-30/12-01. 陸水物理研究会, 2007.  
http://rikusui.sci.hokudai.ac.jp/rikuken/media/2007shiga/07abst5.pdf, (参照 2008-11-21).
  - (7) 環境省. “3. 熱中症を防ぐためには. 1. 日常生活での注意事項”. 熱中症環境保健マニュアル.  
http://www.env.go.jp/chemi/heat\_stroke/manual/003-1.pdf, (参照 2008-11-21).
  - (8) 文部科学省, 日本体育・学校健康センター. 熱中症予防のための啓発資料「熱中症を予防しよう - 知って防ごう熱中症-」.  
http://www.naash.go.jp/kenko/jyohou/nettyusyo.html, (参照 2008-11-21).
  - (9) 持続可能な水供給システム研究会編. 水供給: これからの 50 年. 技報堂出版, 2007, 201p.
  - (10) 特に, 過去に大腸菌 O-157 による大きな被害のあった西日本では, 水筒を持参する小学校が 8 割を超える府県が集中している。
  - (11) 山辺美和. 500ml ペットボトル飲料の普及に関する社会的考察. 『日本文化論年報』. 2000, (3), p. 60-83.
  - (12) 全国清涼飲料工業会. 清涼飲料関係統計資料. 2008 年版, 2008, p. 12-13.
  - (13) 生活情報センター編. 中学生・高校生の食生活データブック. 2002 年版, 2001, p. 124.
  - (14) 時の話題「書店併設カフェ」. 全国生活衛生営業指導センター. 生衛ジャーナル. 2004, (7).  
http://www.seiei.or.jp/journal/pdf/sej200407.pdf, (参照 2008-11-21).  
さらに, 飲食をメインとした「ブックカフェ」という形態もある。ほっとブックカフェ. 読売新聞, 2006-11-16.  
http://www.yomiuri.co.jp/gourmet/food/trend/20061116gr04.htm, (参照 2008-11-21).
  - 志水京子. 就職氷河期に増えたブックカフェ 今, 書店と飲食の距離が急接近中. 日経トレンドネット. 2007-11-12.  
http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/pickup/20071108/1004331/, (参照 2008-11-21).
  - (15) 黛崇仁. 特集, 図書館における飲食マナー: 図書館内での水分の補給: 利用者のマナー. 薬学図書館. 2008, 53(2), p. 144-147.
  - (16) Soete, G. J. Managing Food and Drink in ARL Libraries. SPEC Kit 237. 1998.  
http://www.eric.ed.gov/ERICWebPortal/contentdelivery/servlet/ERICServlet?accno=ED424871, (accessed 2008-11-21).
  - (17) 『薬学図書館』編集委員会. 特集, 図書館における飲食マナー: 図書館における飲食マナー アンケート集計報告. 薬学図書館. 2008, 53(2), p. 148-165.
  - (18) daigaku-syokuin. ペットボトルの持ち込み OK! これでも大学職員のプロダグ-情報センター勤務中-.  
http://d.hatena.ne.jp/daigaku-syokuin/20080514, (参照 2008-11-21).
  - (19) [慶應義塾大学]. 『湘南藤沢メディアセンタードリンクルール』について.  
http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/general/pdf/manner.pdf, (参照 2008-11-21).
  - (20) 関恭子, 長田全弘. 良質な学習環境の維持・向上を求めて: 『湘南藤沢メディアセンター飲食ルール』. MediaNet. 2004, (11), p. 72-73.  
http://www.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/pdf/0110720.pdf, (参照 2008-11-21).
  - (21) 東京歯科大学図書館や慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンターでは, 検討の前提として, 館内に飲食可能スペースを設ける余地がなかったり, 冷水機の設置場所に問題がある等の事情があり, 他の大学も含め, 大学図書館が持ち込みを許可すべき特殊な事例である可能性はある。
  - (22) 図書館内の飲食スペースの有無等については, 以下を参照。また学校図書館の場合は, そもそも給食時や食堂以外での飲食が規制されているため, 図書館での飲食も禁止されている例が多いと思われる。
  - JLA 図書館調査事業委員会. 数字で見る日本の図書館: その 19: 飲食の設備について. 図書館雑誌. 2006, 100(6), p. 394-396.
  - (23) 千代田区立図書館.  
http://www.library.chiyoda.tokyo.jp/, (参照 2008-11-21).
  - (24) 例えば, 浦安市立図書館の「ラウンジ」, 京都市右京中央図書館の「ウッドルーム交流路 (交流室)」等。後者については, 貸出手続きの済んだ資料のみ, 持ち込み可。  
http://library.city.urayasu.chiba.jp/library/lounge/index.html, (参照 2008-11-21).
  - http://www.kyotocitylib.jp/ukyochuo/index.html, (参照 2008-11-21).
  - (25) 愛媛県立図書館. 図書館の利用にあたってのお願い.  
http://www.pref.ehime.jp/160kyouiku/190tosyokan/0000841020725/cyuihtm, (参照 2008-11-21).
  - (26) 京都府立図書館. よくある質問.  
http://www.library.pref.kyoto.jp/faq-a.html#stsb-6, (参照 2008-11-21).
  - (27) 京都府立図書館では, ホームページに掲載する以前から, 館内で配布している「利用案内」に「閲覧室での喫煙, 飲食 (ペットボトルなど閉栓可能な飲料水容器は除く), (中略) はお断りしています」と明記していた。禁止の場合も含め, 他の図書館でも同様の例がある可能性はある。
  - (28) 鳥取県立図書館. 館内でのマナーについて.  
http://www.library.pref.tottori.jp/riyou/riyou.html#tag7, (参照 2008-11-21).
  - (29) 福井県立図書館. 閲覧席の利用について. ご意見箱紹介.  
http://www.library.pref.fukui.jp/guide/goiken.html, (参照 2008-11-21).
  - (30) 香川県立図書館. 図書館の利用マナーについてのごお願い. 図書館かがわ. 2007, (87).  
http://www.library.pref.kagawa.jp/kgwlib\_doc/local/local\_0001-87.html, (参照 2008-11-21).
  - (31) 多摩市立図書館. 水は本の大敵です. やまばと通信. 2008, (172).  
http://www.library.tama.tokyo.jp/yamabato/yamabato172.html, (参照 2008-11-21).
  - (32) 図書館内での飲食に関して長い議論を積み重ねている海外では, 公的なものだけでなく, 調査会社による調査もある。新しいものでは, 以下の資料等が参考になる。  
Primary Research Group. Survey of Library Cafes. Primary Research Group, 2007.
  - (33) 話題の千代田図書館に行ってみた. ず・ぼん. 2007, (13), p. 38-53.
  - (34) たとえば, シアトル公共図書館の “Food and Beverage Guidelines”.  
http://www.spl.org/default.asp?pageID=about\_policies\_foodbev, (accessed 2008-11-21).

## CA1676

### ウィキペディアにおける 情報の質 (IQ) 向上の仕組み

#### はじめに

2008 年 3 月, 無料オンライン百科事典ウィキペディア (Wikipedia ; CA1510 参照)<sup>(1)</sup>に登録されてい

る記事の総数が、250 言語あわせて 1,000 万件を超えた<sup>(2)</sup>。

ウィキペディアは、ウィキ (Wiki) と呼ばれる協同作業支援システムを利用している。通常のウェブブラウザと単純なマークアップ言語による、きわめて低コストの協同的コンテンツ作成を実現したこの技術は、誰もがいつでもウィキペディアの編集者となることを可能にした。しかし、参加への障壁の低さは、ウィキペディアを世界最大のオンライン百科事典へと成長させた一方で、記事内容の信頼性に対する疑いを招いている。つまり、専門家以外の人物や悪意を持った人物が誤った情報を書き込んでしまうのではないか、という懸念である。

#### レファレンス・ツールとしてのウィキペディア

各種オンライン・データベースや OPAC、Google を代表とする検索エンジンなど、インターネットは、レファレンス・サービスを提供する上でいまや欠くことができない。ウィキペディアも、記事数や検索エンジンでのヒット率の上昇とともに、日常的なレファレンス・ツールとしてすっかり定着した観がある。特に、伝統的な事典類には収録されにくい、サブカルチャー分野などの項目の充実は大きな利点である。

しかし、ウィキペディアは事物の概要をつかみ、参考文献の手がかりを得るのには便利だが、記述をそのまま用いる場合には記事内容を十分に吟味する必要がある<sup>(3)</sup>。ウィキペディアの信頼性は確立されておらず、レファレンス・サービスにおいてアカデミックな権威付けがなされた百科事典と同等に扱うことはできない。

また、一部の大学機関は学生のレポート課題におけるウィキペディアの引用禁止を言明しており、それをウィキペディア自体も支持している<sup>(4)(5)</sup>。

#### ウィキペディアの信頼性に関する調査

しかし、複数の研究によって、ウィキペディアにおける情報の質 (Information Quality : IQ) が思いのほか高いことが明らかにされた。特に話題を集めたのが、伝統的な百科事典 “Encyclopaedia Britannica” との比較調査である<sup>(6)</sup>。科学分野の記事 42 項目内の分析の結果、指摘された重大な誤りは両者ともに 4 か所、比較的軽微なものがウィキペディア 162 か所、ブリタニカ 123 か所と、大差は見られなかった。また、研究者たちにウィキペディアの記事の信頼性を評価してもらったところ、それぞれの専門分野に関する記事の評価が、分野外のランダムに選ばれた記事よりも高かった、という研究結果もある<sup>(7)</sup>。

#### ウィキペディアにおける IQ 向上の仕組み

では、ウィキペディアにおける IQ の向上の仕組みとはどのようなものであろうか。ストビリア (Besiki Stvilia) らは、ウィキペディア英語版から無作為抽出

されたデータをもとにケース・スタディを行い、その仕組みについて分析している<sup>(8)</sup>。

#### IQ 保証エージェントの位置づけ

ウィキペディアでは、どのような編集を行うかはユーザー個人個人の自由な選択に任されている。人々は、新しい記事の作成や既存の記事の修正など、IQ を向上させる行為を行うこともあれば、IQ を故意に低下させる「荒らし」行為を取ることもある。その中で、IQ を向上させるエージェントとして模範的な行動が期待されるユーザーが「管理者」 (administrator) である。ちなみに、ウィキペディアの主だった参加形態は表のとおりである。

表 ウィキペディアにおける主な参加形態と権限<sup>(9)</sup>

参加形態の種類	識別方法	権限
IP ユーザー (anonymous user)	IP アドレス	閲覧、編集
登録ユーザー (registered user)	利用者名	閲覧、編集、半保護された項の編集
管理者 (administrator)	利用者名	閲覧、編集、半保護された項の編集、保護・半保護の設定、削除、投稿のブロックの設定 * 管理者権限の付与、 * 利用者名の変更

\* 印は、管理者の中で追加権限を与えられた「ビューロクラット (bureaucrat)」のみの権限である。

管理者には、効率的に IQ の向上に取組めるように、ページの保護・削除や投稿のブロックなどの権限が与えられる。さらにビューロクラットになると、管理者権限の付与や他の利用者名の変更なども可能になる。ただし、管理者になるためには、他の登録ユーザーらによって、過去および現在の活動が評価され、権限を与えるのに適した人物として承認されなければならない。また、ウィキペディアの方針やユーザーらによって培われた慣習を破るような管理者は、他のユーザーからの報告に基づき、解任させられることもある。

ウィキペディアにおける IQ の向上のための取組みは、基本的にユーザーの自発的意志に基づいているが、それらを効率的に進めるために、模範的な IQ 保証活動の担い手がユーザー自身によって選ばれているのである。

なお、こうしたユーザー自身による IQ の向上の取組みは、過去の記述や修正が編集履歴として残され、ユーザーに対して公開されるという、ウィキペディアのシステムを前提としている。これにより、ある編集の是非をユーザー間で議論することや、荒らし行為にあったページを以前の版に戻す「差し戻し」が可能となっている。また、履歴情報には書き込みを行った

ユーザーの利用者名またはIPアドレスも含まれるため、ユーザーの優良・不良の判断を行う際にも参照される。

### IQ 水準の統制

また、ウィキペディアは、全体のIQのレベルを統制するために以下の2つの仕組みを有している。

- ・「秀逸な記事 (featured articles)」ステータスの付与・除去
- ・記事削除

秀逸な記事とは、ウィキペディアによって最良と明示された記事を指し、正確性、中立性、出典の明記などからなる「秀逸な記事の目安 (featured article criteria)」<sup>(1)</sup>に合致するかどうか、ピア・レビューを経て決定されるものである。この決定プロセスのなかで、ウィキペディアの記事が目標とすべきIQの水準が提示される。

反対に、IQの最低ラインを示すことによって、ウィキペディア全体のIQの水準を保とうとするのが記事削除である。ユーザーによって記事の削除が提起されると、実際に削除されるまでの猶予期間が与えられ、原則としてユーザー間の合意形成が求められる。

また、それぞれの判断の基となる、秀逸な記事の目安や削除の方針 (deletion policy) も、こうしたユーザーによる合議を通じて形成され、ウィキペディアの特徴に合わせて進化してきた。

### ノートページ (discussion page)

ウィキペディアは集団的な編集作業を支えるため、ウィキプロジェクトやスタイルマニュアル、テンプレートといった協同作業のためのシステムの数々を発達させてきた。なかでも、ユーザー間のコミュニケーションを目的とするノートページは、IQの向上の取り組みを行うユーザーに恒常的に利用されている。ノートページは、IQに関するユーザー間の対話や提携を助ける重要な機能を果たしている。また、ある記事についての質問のやりとりは、記事の補足として重要な情報源となり、それらの蓄積はFAQ形式の知識ベースとしても活用できる。コミュニケーションのルールや慣習はノートページの議論を通じて確立され、新参のユーザーはノートページからそれらを学習することができる。

秀逸な記事のノートページが質量ともに一般の記事を上回っていることは、ノートページがIQの向上に果たす役割の大きさを物語っている。

### ウィキペディアのIQ保証モデル

上で見たようなウィキペディアのIQ保証の仕組みは、従来の百科事典の編集作業とは大きく異なっている。オープン・アクセス以前の協同的なコンテンツ作成においては、作業を大人数で分担したところで、最

終的には、比較的少数の権威者グループによるチェックを必要としていた。しかし、自己選択を尊重するウィキペディアでは、特別の権限を与えられた管理者でさえ、あくまでもユーザーの一部として存在する。自己選択の尊重は作業分担のコストを大幅に削減し、お互いの編集に対する平等性はユーザーを対立よりも合意形成に向かうように促している。

また、コンテンツ作成とフィードバックのプロセスが統合されているウィキペディアでは、誤りを未然に防ぐかわりに、よりすばやく低コストで誤りを修正することに焦点があてられている。ウィキペディアでは、ユーザーの編集によって新たな誤りが日々生み出されていくが、誤りに気づいたユーザーがそれを即座に修正することが可能である。すなわち、ウィキペディアの公開性は、その信頼性に対する疑義を生み出す原因であると同時に、IQの向上の要ともなっているのである。

### おわりに

集合知を活用した百科事典の試みは、ウィキペディア以外にも広がっている。“Britannica Online”<sup>(2)</sup> (CA1022, E802 参照) や Google 社が公開した “Knol”<sup>(3)</sup> では、著作者の特定や専門家を執筆者として確保するなど信頼性の確保に努めつつ、一般の投稿に対しても一定の門戸を開きつつある。

逆にウィキペディアでは、信頼ある編集者による記事のみを公開することや記事の即時反映を制限することによって、IQ問題を軽減しようという検討もなされている<sup>(4)</sup>。しかし、編集の公開性や平等性を尊重することによって発展してきたウィキペディアにおいて、それがユーザーに受け入れられるかどうかは明らかでない。

(主題情報部人文課：石澤<sup>いしざわ</sup> 文<sup>あや</sup>)

- (1) Wikimedia Foundation. Wikipedia. <http://www.wikipedia.org/>, (accessed 2008-10-02).
- (2) Wikimedia Foundation. “Wikipedia Hits Milestone of Ten Million Articles Across 250 Languages”. Wikimedia Foundation. [http://wikimediafoundation.org/wiki/Press\\_releases/10M\\_articles](http://wikimediafoundation.org/wiki/Press_releases/10M_articles), (accessed 2008-10-02).
- (3) 兼宗進. デジタル・レファレンス・ツールとしての Wikipedia. 情報の科学と技術. 2006. 56 (3), p. 103-107. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004668714/>, (参照 2008-10-02).
- (4) Chen, Lysa. “Several colleges push to ban Wikipedia as resource”. The Chronicle. <http://media.www.dukechronicle.com/media/storage/paper884/news/2007/03/28/News/Several.Colleges.Push.To.Ban.Wikipedia.As.Resource-2809247.shtml>, (accessed 2008-10-02).
- (5) 時実象一. (私の視点) ウィキペディア 安易な引用はやめよう. 朝日新聞. 2007-07-24 朝刊, p. 15.
- (6) Giles, Jim. Internet encyclopaedias go head to head. Nature. 2005. 438 (7070), p. 900-901.
- (7) Chesney, Thomas. An empirical examination of Wikipedia's credibility. First Monday. 2006. 11 (11). <http://www.uic.edu/htbin/cgiwrap/bin/ojs/index.php/fm/article/view/1413/1331>, (accessed 2008-10-02).
- (8) Stvilia, Besiki et al. Information Quality Work Organization in Wikipedia. Journal of the American Society for Information Science & Technology. 2008. 59 (6), p. 983-1001.

- (9) 表の作成にあたっては以下を参考にした。Stvilia, Besiki et al. Information Quality Work Organization in Wikipedia. Journal of the American Society for Information Science & Technology, 2008, 59 (6), p. 988-991.; 山本まさき, “ウィキペディアの管理者とは”. ウィキペディアで何が起きているのか: 変わり始めるソーシャルメディア信仰, 山本まさきほか, 九天社, 2008, p. 15-18.
- (10) Wikimedia Foundation. “Wikipedia:Featured article criteria”. Wikipedia. [http://en.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:Featured\\_article\\_criteria](http://en.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:Featured_article_criteria). (accessed 2008-11-07).
- (11) Encyclopaedia Britannica. Britannica Online. <http://www.britannica.com/>. (accessed 2008-10-02).
- (12) Google. Knol. <http://knol.google.com/>. (accessed 2008-10-02).
- (13) Stvilia, Besiki et al. Information Quality Work Organization in Wikipedia. Journal of the American Society for Information Science & Technology, 2008, 59 (6), p. 983-1001.

Ref.  
山本まさきほか, ウィキペディアで何が起きているのか: 変わり始めるソーシャルメディア信仰, 九天社, 2008, 219p.

## CA1677 XXXXXXXXXX 図書館による API の公開 — PORTA の事例から —

### はじめに

最近、Google や Amazon をはじめ、多くのウェブサービスが API (Application Programming Interface) を公開している。図書館界においても、OCLC が検索用 API<sup>(1)</sup>や、メタデータ間のクロスワーク (CA1552 参照) を行うことのできる API<sup>(2)</sup>を公開するなど、その動きが少しずつ広まっている。

一方で、API がどのようなものであり、何が便利なのかについては、日本の図書館界ではまだあまり知られていないのではないと思われる。

そこで、本稿では API、その中でも特に Web API について簡単に紹介するとともに、国立国会図書館デジタルアーカイブポータル (PORTA) の外部提供インタフェースについて述べ、Web API の公開の意義について考察する。

### Web API とは

そもそも API とは、あるプログラムやソフト (以下、単にプログラムという) が別のプログラムの機能呼び出して使うためのインタフェースのことを指す。この API の役割を図に表したのが図 1 である。

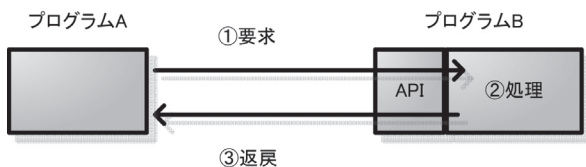


図 1 API の役割

あるプログラム A が、別のプログラムであるプログラム B の機能を使いたいとする。A は B の API を通じて、あらかじめ決められた手順で要求をすると (①)、B はその要求に対応して処理をする (②)。B

はその結果を、API を通じて、あらかじめ決まった形式で A へ返す (③)。

このように、それぞれのプログラムの間で仕事を依頼するために決まっている「手続き」が API である。API を使えば、自分のプログラムに備わっていない機能を、自前で開発しなくても簡単に実現できる。逆に言えば、API がない場合には、自前でその機能を開発しなければならない。そのため、文字を入力したり、その入力した文字を画面に表示したりするといった、多くの人が共通で利用すると考えられる機能については、OS 等が様々な API を提供し、簡単に利用できるようになってきている。

こうした API は、元々は同じコンピュータの中にある別のプログラムの機能を利用するために用意されていたが、やがてインターネットが普及してくると、Web API が登場した。これはインターネットを通じてウェブ上で展開しているサービスの機能を利用できる (図 1 の①、③のやり取りをインターネットを通じて行う) API である。本稿の最初で挙げた、Google や Amazon、OCLC 等が公開しているのも、この Web API と呼ばれる種類のものである。例えば Amazon Web サービス<sup>(3)</sup>では、インターネットを通じて REST という形式で Amazon の Web API へ表示させたい書籍の ISBN 等を渡すと (①)、Amazon 側で該当の書籍の情報を準備し (②)、またインターネットを通じて XML 形式でその書籍の情報 (例えば書誌、カスタマーレビュー、表紙画像の URL、関連商品の情報等) を返してくれる (③)、というように使うことができる。

### Web API を使うメリット

#### 1. 利用する側にとっての Web API

Web API は、インターネットを通じて他システムの機能が容易に利用できること、その機能の多くが実サービスで使われており実用的であること、無料で公開されているものが多いこと、といった理由から、広く使われている。

とりわけ大きなメリットは、自分が必要とする機能を提供してくれる API が公開されていれば、同じ機能を重複して開発する必要がなく、開発にかかるコストを抑えることができるという点である。特に、開発に高度なスキルが必要な機能、例えば厳重なセキュリティを持つユーザ認証機能を独自に開発する場合には相応のコストが必要となるが、Web API を通じて OpenID<sup>(4)</sup>のようなサービスを利用することによって、高度なユーザ認証機能を簡単に自分のシステムに実装することができる。

また個人では持ちえないようなデータを使うことができる点も大きなメリットである。衛星写真はもち